

令和7年9月7日

環境大臣 浅尾慶一郎 様

一般社団法人日本鳥学会
鳥類保護委員会
委員長 澤 祐介

北海道東部太平洋岸における海鳥類および海棲哺乳類の
高病原性鳥インフルエンザ感染拡大を踏まえた恒久対応に関する要望書

記

日本鳥学会は、鳥学の発展及び鳥類の保全と管理への学術的貢献を目的とする学術団体です。2004年5月には、国内における高病原性鳥インフルエンザ（HPAI）感染の発生に際し、関連情報と課題を整理するとともに、監視や研究について提言を行いました（日本鳥学会 2004）。このたび、北海道東部太平洋岸において2025年3月半ばから5月末にかけて深刻化した、海鳥類および海棲哺乳類のHPAIとその対応を踏まえ、鳥類を含む生物多様性保全の見地から、以下の対策を強く要望いたします。

【背景】

HPAIは、野生鳥類に深刻な影響を及ぼし、その感染拡大は地域の生態系、人間社会、観光・文化資源にも甚大な影響を与えます。2025年3月以降、北海道東部の太平洋岸において、ウミスズメ類やカモメ類といった海鳥類の間で相次いでHPAIの感染による大量死が発生しています。4月には、エトロフウミスズメを中心に200羽以上の海鳥類の死体が漂着し、その中には絶滅危惧種に指定される種も含まれています（付表1,2）。また、同地域ではゼニガタアザラシやラッコといった海獣類においても感染が確認され、両種の国内個体群の存続に影響が及ぶことが懸念されています（付表3）。

今回のHPAI発生時、根室市と厚岸町では学芸員や日本野鳥の会レンジャーなど有志によるグループや自治体職員が独自に調査、巡視を行い、死体の回収を実施されたことに敬意を表します。これらの地域では海鳥への感染状況が把握され、環境省や北海道への情報共有、市民への注意喚起、沿岸島嶼での緊急調査などの実施につながりました。一方、十分な調査が行われなかった北海道東部の他地域でも、当学会、鳥類保護委員会の委員の一人である外山による感染収束後の聞き取りにより、沿岸や沖で多数の海鳥死体が確認されていたことが判明しました。このことを教訓とし、環境省の主導による、沿岸域におけるHPAI発生にそなえたモニタリング体制や、大量漂着時における死体回収体制の構築を要望します。

世界でのHPAI発生の動向をみると、2020年以降、世界各地で海鳥類の集団繁殖地にお

ける HPAI 感染報告が急増し、海鳥類や海獣類も多数犠牲となり (Avery-Gomm et al. 2024、Campagna et al. 2023、Camphuysen & Gear 2022、Knief et al. 2024、Lair et al. 2024)、2024 年には南極大陸への HPAI ウイルスの侵入も確認されました (Bennett-Laso et al. 2024、WOAH 2024)。家禽生産上のリスクに加え人に感染しパンデミックを引き起こす可能性があるとして、家禽を中心とした HPAI の監視が続けられています。しかし、こうした世界中での野生鳥類や野生哺乳類における大量死が頻発する近年の状況を鑑み、生物多様性保全上も留意すべき感染症と捉え、野生動物における HPAI サーベイランスの目的に生物多様性保全を加えるべきとされています (CMS FAO Co-convened Scientific Task Force on Avian Influenza and Wild Birds 2023)。

日本では現在、環境省が『野鳥における高病原性鳥インフルエンザに係る対応技術マニュアル』を策定し対応にあたっていますが、北海道東部太平洋岸での HPAI 発生時にみられたように、現行の対策では防疫体制に不十分な点が見受けられます。今回の対応をもとに現行の体制を見直すとともに、国際的な観点からの防疫体制強化について、以下の通り要望します。

※ 国内外における野生鳥類の HPAI 感染状況と海鳥類繁殖地での感染拡大の問題点については参考資料を参照ください。

【要望事項】 沿岸地域における感染拡大時の対応体制の整備

現行の『野鳥における高病原性鳥インフルエンザに係る対応技術マニュアル』は、主に猛禽類やガンカモ類、ツル類などの検査優先種に指定されている鳥種の死亡個体が発見された際の検査までの対応が中心となっており、今回の北海道東部太平洋岸地域で発生したような海鳥の大量漂着 (マストランディング) や大量死、アザラシ等の海棲哺乳類での感染、集団繁殖地での感染拡大に対する具体的な対応については記載されていません。

沿岸地域は、人の往来が多く、漁業活動や観光とも密接に関わるため、ヒト社会への二次感染や経済活動に波及する懸念もあります。さらに、感染した個体が遠隔地の地域の集団繁殖地へ移動することで、国内外の新たな感染源となる恐れもあります。これらを防ぐため、沿岸地域における防疫体制の強化について、以下の整備を早急に図ることを求めます。

- ・環境省、都道府県、市町村、研究機関、漁協等関係機関による沿岸域での広域連携体制の確立
- ・沿岸域遠視を目的とした作業フロー・役割分担の明確化と防疫作業に必要な資材の確保
- ・漂着個体の迅速な回収・処理体制の整備
- ・沿岸域監視を含めた環境省による対応技術マニュアルの改訂と実地研修等の実施
- ・沿岸域を含め、HPAI による大量死発生時にサーベイランスにあたる専門家による恒久的な調査チームの設立

【将来的に整備すべき課題】国の主導による野生動物の防疫体制の強化

「人、動物、生態系の健康を持続的にバランスよく最適化することを目的とした、統合的かつ統一的なアプローチ」と定義されるワンヘルスの枠組みは（FAO et al. 2021）、国際機関や各国の政策で採用されており（羽山 2025）、日本でも人獣共通感染症対策等において、厚生労働省、農林水産省、環境省の連携が進められています（厚生労働省 2025）。野生動物が HPAI に感染した場合においても、国際獣疫事務局（WOAH）、国際連合食糧農業機関（FAO）、移動性野生動物種の保全に関する条約（ボン条約）、ラムサール条約等の国際機関および条約により、各加盟国や各締約国に対し、HPAI 発生の報告、サーベイランスやリスク評価等の対応が義務付けまたは要請されています。また、日米などの二国間渡り鳥保護条约会議や東アジア・オーストラリア地域フライウェイ・パートナーシップ（EAAFP）などの国際的な取り組みにおいても、HPAI は重要なトピックとされてきました（環境省 2023; 2024a）。

我が国における野鳥 HPAI サーベイランスは鳥獣保護管理法に基づいて実施されています（環境省 2024a）。しかしながら、2021 年度より環境省が主催する「野生鳥獣に関する感染症対策としての鳥獣保護管理方針検討会」で議論が続けられているにもかかわらず（環境省 2024b）、未だ野生動物感染症に対応するための根拠となる法整備は進んでいません（羽山 2025）。また、自治体は自治事務として環境省の野鳥 HPAI サーベイランスに協力しているため、自治体間で対応の差が生じています（Moriguchi et al. 2021）。

移動能力の高い野生鳥類が運び、急速に感染拡大する HPAI に対処するためには、恒常的な野生動物疾病サーベイランスの継続と、野生動物における大規模感染時の防疫体制の整備が必要です。そのためには、環境省が野生動物疾病に対応する法律を整備して予算を確保し、自治体・関係機関を束ねた対策本部の設置と予算分配、人員の投入が不可欠です。我が国における「野生動物疾病に係る防疫対策」の強化は、生態系の保全だけでなく、国民の生活・産業の安全を守るための社会的なインフラ整備でもあります。本件は、国際的な対応責任に加え、生物多様性国家戦略および地球規模の感染症対策の一環として、野生動物疾病に対応する法整備を含めた国の緊急対応体制を確立していくことが求められます。

【参考資料】

国内外における野生鳥類の HPAI 感染状況と海鳥類繁殖地での感染拡大の問題点

- ・我が国においても、2022 年 11 月から 2023 年 3 月にかけて、鹿児島県出水市では約 1,500 羽のツル類が HPAI に感染し死亡したとされています(Esaki et al. 2025)。北海道では、主に渡り鳥であるガンカモ類やそれらを捕食する猛禽類で HPAI の感染が確認されてきましたが、2022 年から 2023 年の冬以降、留鳥であるカラス類において冬期間を通じた感染が初めて確認されました。従来の渡り鳥を介した季節的な感染パターンとは異なる、新たな感染動態が示唆されています。
- ・野生鳥類における HPAI の大流行は、家禽農場への感染拡大リスクとなります。さらに、現在世界各地で流行している H5N1 亜型の HPAI ウイルスは、野生鳥類から野生哺乳類への感染拡大に加え(James et al. 2023)、野生哺乳類間での感染が生じている可能性も指摘されています(Uhart et al. 2024)。
- ・国外においては、2020 年以降、海鳥類の集団繁殖地での HPAI 感染が急増しており、カナダの海鳥類の繁殖地ではシロカツオドリ 25,000 羽、ウミガラス 8,000 羽(Avery-Gomm et al. 2024)、イギリスではキタオオトウゾクカモメ 1,400 羽が死亡し (Camphuysen & Gear 2022)、北西ヨーロッパのサンドウィッチアジサシでは繁殖個体数の 17%に相当する 20,000 羽以上が死亡するなど、多大な影響が出ています (Knief et al. 2024)。カナダでは、2022 年 4~9 月に例年の 3.7 倍に相当する 209 頭のアザラシ類 (ゼニガタアザラシ 127 頭を含む) が漂着し、一部の個体から HPAI ウイルスが検出されました (Lair et al. 2024)。南米では、2022 年にミナミゾウアザラシの HPAI による大量死が発生し、推定 18,000 頭の幼獣が死亡しました (Campagna et al. 2023)。
- ・海鳥類は、海洋生態系において多くの魚類や無脊椎動物を捕食する高次捕食者であり、陸と海をつなぐ重要な生態系構成員です (Brooke 2004)。彼らは海で採食し、繁殖地で排泄物や死体を通じて陸上に栄養素を供給し、島嶼の特異な植生や生態系を支えています (亀田 2007、Kazama 2019)。また、こうした繁殖地は環境教育や観光資源としての価値も高く、文化的な生態系サービスも提供しています。
- ・海鳥類の繁殖地は、多数の個体が高密度で生息すること、雛や幼鳥は感染症への抵抗力が弱いことから、感染症が広がりやすい環境となります。海鳥類の成鳥個体間や同所的に生息するカラス類の個体群内でウイルスが保持されている場合、集団繁殖地内で大規模な感染が生じる恐れがあります。海鳥類とその繁殖地でおこる HPAI の感染拡大は、自然生態系のバランス、沿岸地域の産業・文化資源、公衆衛生のいずれにおいても深刻な脅威であり、その感染個体の速やかな回収等による封じ込めと影響の最小化の対応が必須です。そのためにも、今回要望している「沿岸地域における感染拡大時の対応体制の整備」が重要となります。

付表1：2025/3/14~5/28 までに根室市周辺沿岸および沖合で確認された海鳥類の死亡状況

目	科	種	確認数	鳥インフル 検査結果	環境省 レッドリスト記載種
カモ	カモ	シノリガモ	2		
		ピロードキンクロ	12	A型陽性	
		クロガモ	9		
		コオリガモ	3		
		ウミアイサ	4		
カイツブリ	カイツブリ	アカエリカイツブリ	12	高病原陽性	
		カンムリカイツブリ属sp.	10		
チドリ	カモメ	ウミネコ	109	高病原陽性	
		シロカモメ	1		
		セグロカモメ	1		
		オオセグロカモメ	45	高病原陽性	準絶滅危惧種
		カモメ属sp.	16		
	ウミスズメ	ハシブトウミガラス	13	高病原陽性	
		ウミガラス	10	高病原陽性	絶滅危惧IA類
		ウミガラス属sp.	12		
		ケイマフリ	13	高病原陽性	絶滅危惧II類
		ウミスズメ	8	高病原陽性	絶滅危惧IA類
		コウミスズメ	1		
		エトロフウミスズメ	300	高病原陽性	
		ウトウ	52	高病原陽性	
ウミスズメ科 (属および種は不明)	12				
アビ	アビ	オオハム	3	高病原陽性	
		シロエリオオハム	1		
		ハシジロアビ	2	A型陽性	
		アビ属sp.	14	高病原性	
ミズナギドリ	アホウドリ	コアホウドリ	2		絶滅危惧IB類
	ミズナギドリ	ハシボソミズナギドリ属sp.	2		
カツオドリ	ウ	ヒメウ	8		絶滅危惧IB類
		ウミウ	3		
		ウ科 (属および種は不明)	5		
合計			685個体	12種	6種

付表2. 根室市周辺で回収した野生鳥類における HPAI の検査状況。種ごとの検査数と HPAIV 陽性高病原性確定または PCR 検査により A 型インフルエンザウイルス PCR 陽性が含まれる確認数。(根室市内・2025 年 7 月時点)

科名	種名	検査数	陽性数	陽性率	判別
カモ	ビロードキンクロ	1	1	1	A型陽性
	クロガモ	1	0	0	
	コオリガモ	1	0	0	
カイツブリ	アカエリカイツブリ	2	2	1	高病原確定
カモメ	ウミネコ	10	10	1	高病原確定
	オオセグロカモメ	4	4	1	高病原確定
ウミスズメ	ハシブトウミガラス	1	1	1	高病原確定
	ウミガラス	5	5	1	高病原確定
	ケイマフリ	2	2	1	高病原確定
	ウミスズメ	2	2	1	高病原確定
	エトロフウミスズメ	5	5	1	高病原確定
	ウトウ	8	8	1	高病原確定
アビ	オオハム	2	2	1	高病原確定
	ハシジロアビ	1	1	1	A型陽性
	アビsp.	3	3	1	高病原確定
ウ	ヒメウ	1	0	0	
合計		49	46	94%	12種

※アビ属 sp.は種まで同定できていないため、感染確認種数に含まない。

付表3. 根室市内沿岸で確認された海棲哺乳類の死体、種ごとの数、検査数、HPAI 陽性数
2025 年 7 月時点

目	科	種	確認数	回収数	検査数	陽性数
食肉目	イタチ	ラッコ※	4	4	4	3
		ゼニガタアザラシ※	10	5	5	2
	アザラシ	ゴマフアザラシ	3	0	0	0

引用文献

- Avery-Gomm, S., Barychka, T., English, M., Ronconi, R. A., Wilhelm, S. I., Rail, J. F., ... & Wight, J. (2024). Wild bird mass mortalities in eastern Canada associated with the Highly Pathogenic Avian Influenza A (H5N1) virus, 2022. *Ecosphere*, 15(9), e4980.
- Bennett-Laso B, Berazay B, Muñoz G, Ariyama N, Enciso N, Braun C, Krüger L, Barták M, González-Aravena M & Neira V (2024) Confirmation of highly pathogenic avian influenza H5N1 in skuas, Antarctica 2024. *Front Vet Sci* 11: 1423404.
- Brooke, M. de L. 2004. The food consumption of the world's seabirds. *Proc. R. Soc. Lond. B* (Suppl.) 271, S246-S248.
- Campagna, C., Uhart, M., Falabella, V., Campagna, J., Zavattieri, V., Vanstreels, R. E. T. & Lewis, M. N. (2024). Catastrophic mortality of southern elephant seals caused by H5N1 avian influenza. *Mar. Mammal Sci.* 40, 322-325.
- CMS FAO Co-convened Scientific Task Force on Avian Influenza and Wild Birds (2023). Scientific task force on avian influenza and wild birds statement on: H5N1 high pathogenicity avian influenza in wild birds - unprecedented conservation impacts and urgent needs. URL: <https://www.cms.int/en/workinggroup/scientific-task-force-avian-influenza-and-wild-birds>. 参照日 2025-09-02.
- Cunningham, E. J., Gamble, A., Hart, T., Humphreys, E. M., Philip, E., Tyler, G., & Wood, M. J. (2022). The incursion of Highly Pathogenic Avian Influenza (HPAI) into North Atlantic seabird populations: an interim report from the 15th International Seabird Group conference. *Seabird*, 34, 67-73.
- Esaki, M., Okuya, K., Tokorozaki, K., Haraguchi, Y., Hasegawa, T., Ozawa, M. (2025). Highly pathogenic avian influenza A(H5N1) outbreak in endangered cranes, Izumi Plain, Japan, 2022-23. *Emerg. Infect. Dis.* 31, 937-947.
- FAO, OIE, WHO, UNEP (2021) Joint Tripartite (FAO, OIE, WHO) and UNEP Statement. URL: <https://wedocs.unep.org/bitstream/handle/20.500.11822/37600/JTFOWU.pdf>. 参照日 2025-09-02.
- 羽山伸一 (2025). ワンヘルスという共存～野生動物と人間のかかわりをとらえなおす新たな視座～. (森林環境研究会 (編). 森林環境 2025 特集 野生動物と人間.) 32-41. 公益財団法人森林文化協会, 東京.
- James, J., Billington, E., Warren, C. J., De Sliva, D., Di Genova, C., Airey, M., Meyer, S. M., Lewis, T., Peers-Dent, J., Thomas, S. S., Lofts, A., Furman, N., Nunez, A., Slomka, M. J., Brown, I. H. & Banyard, A. C. (2023). Clade 2.3.4.4b H5N1 high pathogenicity avian influenza virus (HPAIV) from the 2021/22 epizootic is highly duck adapted and poorly adapted to chickens. *J. Gen Virol.* 104, 001852.

- 亀田佳代子. (2007). 陸上生態系と水域生態系をつなぐもの. (財)山階鳥類研究所(編) 保全鳥類学. pp.167-189. 京都大学学術出版会, 京都.
- 環境省 (2023). 東アジア・オーストラリア地域フライウェイ・パートナーシップ (EAAFP) 第 11 回パートナー会議の結果概要について.
URL: https://www.env.go.jp/press/press_01320.html. 参照日 2025-09-02.
- 環境省 (2024a). 第 10 回日米渡り鳥等保護条約会議の結果概要について.
URL: https://www.env.go.jp/press/press_02684.html. 参照日 2025-09-02.
- 環境省 (2024b). 野鳥における高病原性鳥インフルエンザに係る対応技術マニュアル.
URL: https://www.env.go.jp/nature/dobutsu/bird_flu/manual/pref_0809.html. 参照日 2025-09-02.
- 環境省 (2024c). 野生鳥獣に関する感染症対策としての鳥獣保護管理方針検討会.
URL: <https://www.env.go.jp/nature/choju/infection/committee/R03review.html>. 参照日 2025-09-02.
- Kazama, K. (2019). Bottom-up effects on coastal marine ecosystems due to nitrogen input from seabird feces. *Ornithological Science*. 18: 117-126.
- Knief, U., Bregnballe, T., Alfarwi, I., Ballmann, M. Z., Brenninkmeijer, A., Bzoma, S., & Courtens, W. (2024). Highly pathogenic avian influenza causes mass mortality in Sandwich Tern *Thalasseus sandvicensis* breeding colonies across north-western Europe. *Bird conservation international*, 34, e6.
- 厚生労働省 (2025) ワンヘルス・アプローチに基づく人獣共通感染症対策.
URL: <https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000172990.html>. 参照日 2025-09-02.
- Lair, S., Quesnel, L., Signore, A. V., Delnatte, P., Embury-Hyatt, C., Nadeau, M. S., Lung, O., Ferrell, S. T., Michaud, R. & Berhane, Y. (2024). Outbreak of highly pathogenic avian influenza A(H5N1) virus in seals, St. Lawrence estuary, Quebec, Canada. *Emerg. Infect. Dis.* 30, 1133-1143.
- Moriguchi, S., Hosoda, R., Ushine, N., Kato, T. & Hayama, S. (2021). Surveillance system for avian influenza in wild birds and implications of its improvement with insights into the highly pathogenic avian influenza outbreaks in Japan. *Prev. Vet. Med.* 187, 105234.
- 日本鳥学会 (2004) . 日本鳥学会 鳥インフルエンザ問題検討委員会の検討結果報告 (日本における鳥インフルエンザ問題の現状と課題.)
URL:https://ornithology.jp/materials/birdflu/birdflu_main.html. 参照日 2025-09-02.
- Puryear, W. B. & Runstadler, J. A. (2024). High-pathogenicity avian influenza in wildlife: a changing disease dynamic that is expanding in wild birds and having an increasing impact on a growing number of mammals. *JAVMA-J Am. Vet. Med. A.* 262, 601-609.
- Uhart, M. M., Vanstreels, R. E. T., Nelson, M. I., Olivera, V., Campagna, J., Zavattieri, V.,

Lemey, P., Campagna, C., Falabella, V. & Rimondi, A. (2024). Epidemiological data of an influenza A/H5N1 outbreak in Elephant Seals in Argentina indicates mammal-to-mammal transmission. *Nat. Commun.* 15, 9516.

WOAH. (2024). Wildlife under threat as avian influenza reaches Antarctica.

URL:<https://www.woah.org/en/wildlife-under-threat-as-avian-influenza-reaches-antarctica/>. 参照日 2025-09-02.